

情報教育・インターネット利用が大学生の情報活用能力に与える影響

三次 史織

情報化社会においては個人が情報を正しく活用していく能力（情報活用能力）が求められており、文部科学省は「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」であり、情報の収集・発信力、理論の理解力、参画する態度などからなる総合的な能力であると定義している。大学でもこの能力を高めるための情報教育が行われている。

先行研究では大学の授業によって情報機器に対するスキルや意識が変化することが分かっているが、多くの研究では、単に情報に対する意識やPCを活用する能力を情報活用能力とみなしており、情報活用能力を総合的な能力として捉えているものは少ない。情報活用能力を測るための指標として高比良らによる「情報活用の実践力尺度」がある。そこで、本研究では、この指標を用いて初年次の情報教育の内容の違いによる能力の差、専門教育を受けることにより向上する能力を明らかにする。また、実践力尺度を用いた研究では、インターネットの使用量や情報機器の種類との関係について多く論じられているが、利用態度との関係は明らかにされていない。インターネット使用量・情報技術の利用態度の積極性との関係を明らかにし、情報機器の利用が与える影響についてさらに考察を深める。

調査方法は授業担当教員へのインタビュー調査と学生へのアンケート調査を実施した。調査対象は筑波大学国際総合学類1年次と知識情報・図書館学類の1年次・4年次の学生とした。また、初年次の情報教育として比較する授業は、国際総合学類は筑波大学で1年次生全員の必修科目として開講されている「情報(実習)」、知識情報・図書館学類は「情報(実習)」に代えて学類独自に開講している「情報基礎実習」をとりあげた。

調査の結果、2つの授業内容の特徴は明らかにできたが、国際総合学類の回答者数が少なかつたため、初年次に対する情報の授業内容の違いが情報活用能力に与える影響については明らかにすることができなかった。知識情報・図書館学類の1・4年次の情報活用の実践力全体の得点を比較すると4年次の方が高く、特に下位能力の判断力については4年次の方が有意に高かった。よって大学の授業、特に専門的な授業の受講は情報活用能力、特に判断力を高めるために重要な役割を担っていることが分かった。また、インターネットの使用量が情報活用能力に大きく影響を及ぼしていることを改めて確認することができた。SNSの利用時間は電子メール使用時間やHP閲覧時間ほど大きな影響は与えていなかった。さらに、単なる使用量だけではなく、情報技術に対する積極性の高さは表現力、創造力、発信・伝達力に正の影響を与えていることが分かった。情報技術の機能の認知度についても、認知度の高い方が情報活用の実践力尺度のほぼ全ての能力が高くなることが分かった。

(指導教員 歳森敦)